熊谷厄除大師常光院

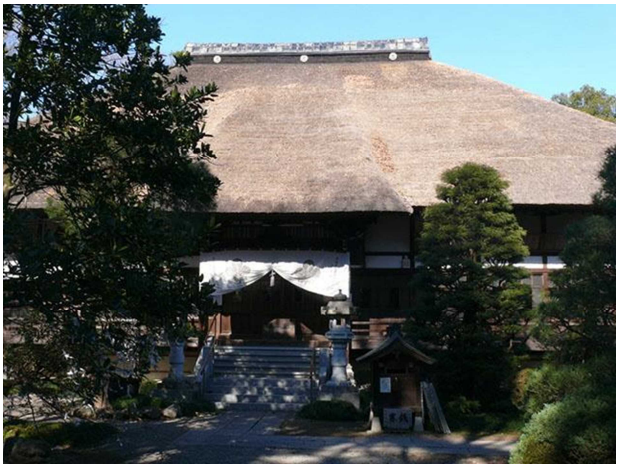
中条公民館長　石川耕作

普段の日にも厄除に来る方も多いのですが、十二月三十一日大晦日は新年の家内安全を祈願する地元の方々をはじめ、近隣の善男善女が境内に所狭しと集まり、また除夜の鐘をつく人たちが長い列を作り順番を待っています。

常光院の歴史をお話ししましょう。常光公の孫の中条出羽守藤原朝臣家長公が鎌倉幕府の評定衆となり鎌倉に常任するために中条館を祖父常光公と殉死した愛童の菩提を弔うために、比叡山名僧を迎えて寺とし、龍智山毘盧舎那寺常光院と名付け建久三年（1192）年開基した。爾来法燈連綿として第四十一世となっている。開基以来比叡山延暦寺の直末で、京都大原三千院門跡の公弁法親王から御令旨とその御紋章を下付され寺紋としている。寺格は十万石で東叡山の伴頭寺として重きをなしてきた。

◇中条氏の起こり◇

条里の布かれていた地域の中央に位置していた中条保を統治する行政組織の長として、藤原鎌足から十六代目の子孫判官常光公が武蔵の国司として中条判官藤原常光と名乗ったのが中条氏の始まりである。常光公が土地の豪族白根氏の娘を娶り、居を構えた所が常光屋敷（常光屋敷）であり、今も土塁や遺構を残している。



常光墓碑文中に「邨中又有旧阯稱光屋敷今守阯両三戸白根氏某等也」とあるが、今もまさにその通り白根家三戸並んでいる。

（熊谷市公協だより　第 43 号　平成 17 年より）